

オプション教材ガジユマロ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

3.

5.

5.

テーマパークのなかでもっとも成功した例として引き合いに出されるのが、長崎のハウステンボスである。「ヨーロッパアンティスト」に遊ぶ楽しみを提供する空間として宣伝されるテーマパークである。しかし、この概念化された空間には、その概念化を拒否する要素がある。建物の背景に見える長崎地方の山である。コンセプトはこの風景によって綻びをみせる。この山の風景は、ヨーロッパという概念から取り残され、ヨーロッパアンティストという概念を極東という日本の現実につなぎとめる。つなぎとめることは実は、概念への夢想を覚醒するという効果をもっている。コンセプトはこの風景によって綻びを見せるのである。

概念の綻びを見せるこの風景については、たとえば中世に築造された日本庭園での「借景」を考えてみると興味深い。自然を抽象化し、囲い込まれた寺院の空間につくられる庭園は、さまざまにデザインされる。たとえば、京都嵐山の天龍寺の庭園は夢窓疎石によると伝えられるものであるが、その背景に嵐山を借景として取り入れている。この借景は、日本庭園のコンセプトにとつてむしろ積極的な意義を与えている。それはつくられた庭園ではあるが、この空間は結局は現実の空間のなかに位置づけられることである。「借景」とは、たしかに庭園外の景物がその庭園空間の景物として位置づけられるという意味で、コンセプトのなかに取り込まれる事態を意味している。しかし、逆に、概念として構想された庭園空間がつねに現実的な世界のなかに位置づけられているといういわば「醒ます」効果をもっている。そして借景の価値のひとつは、この「醒ます」効果のうちにあるように思う。

天龍寺の庭園をつくったといわれる夢窓疎石は、『夢中問答集』で、「世間の珍しい宝物を愛好するなかに、山水をもまた愛して、奇石珍木を選び求めて、集めて置くひともある。このようなひとは山水のやさしさを愛さず、たんに俗塵を愛するひとである」と述べている。またつぎのような重要なことばがある。

夢窓疎石の思想では、庭園をつくるにも、山河大地草木瓦石を自己の本分として心得て、山水を愛するべきだということになる。庭園は限定された空間であるが、それをつねに山河大地との関連でとらえることの重要性がここには語られている。コンセプトと外界との関係をとらえるのに、夢窓疎石のように考えるのと、テーマパークの思想では、ちやうど逆の発想になっていることが分かる。テーマパークの思想では、ヨーロッパ風景の向こうに見える日本の山は、概念のいわば綻びである。これに対して、日本庭園では、借景となっている山は、概念と風景とを結びわけて重要な、積極的な役割を担っている。

テーマパークの思想は、空間に価値を与えるという積極的な意味をもっているように見える。しかし、ここには意味を付与することが豊かな空間をつくることであるという重大な錯覚が潜んでいる。一定の概念がその空間のもっていた多様な解釈の可能性を廃棄してしまうのである。テーマパークでは空間の価値のコンセプトが、その空間の囲い込みと大規模な土木工事を伴うという点で、空間そのもののもつ価値の多様性を損なう。しかも、この囲い込みは、物理的な隔壁によって行われる。いわばハードなゾーニングである。このようなハードゾーニングとしてのテーマパークの経営が破綻したときのことを考えるとよい。それはコンセプトの破綻であるが、管理できなくなった空間は囲いこまれたまま放置される。しかし、そこには、雑草が侵入してくるであらう。自然にはゾーニングは存在しない。それはただ人間の概念的思考によって生み出されるのである。

(桑子敏雄『環境の哲学』による)



自己決定・自己責任というのは裸の自己として、孤立無援で社会に立ち向かうことです。百パーセントのリスクを引き受ける代わりに、獲得された利益もまた誰とも共有せず、百パーセント独占すると宣言する主体が「しなやかで、たくましい個」として称揚される、という構図です。

このような「孤立した人間」を「自立した人間」として自己形成のロールモデルに掲げることが、だいたい八〇年代半ばくらいからフェミニズムとポスト・モダンズムに支援されるかたちで日本社会全体でしだいに合意を得てゆきました。「自立」と「孤立」の間には実際には千里の逕庭があるのですが、そのことを指摘した人はほとんどいません。

「孤立している人」ととって、他者はすべて彼または彼女の自由や自己実現の妨害者です。百パーセントの自由を享受するのが「孤立した人間」の目標なわけですから、「他者が存在する」ということ自体がすでに主体の自由を制約することになります。主体は他者が占めている空間については、そこを可動域に算入できない。可動域について制約があるということは、主体の自由が損なわれているということですから、「孤立した主体」ととって、理論的に最高の状態というのは、世界に彼の他に人間が一人もない状態だということになります。そうでしょう。そこにいるのが「敵」であれば、もちろん主体の自由の妨害者ですし、「友人」であれば支援や連帯の義務が生じるし、「奴隷」であっても扶養と管理という煩瑣な仕事を伴う。つまり、「百パーセントの自己決定・自己実現」というありえないものを求める人間は、論理の必然として、自分以外に誰が存在しても、それが自己実現の妨害者になるという不快な条件を生きなければならぬ。

「自立している人間」というのは、そういうものではありません。「自立」というのは属人的な性格ではないからです。「オレは自立しているぞ」といくら力んでみても、それだけでは自立した人間にはなりません。その人の判断や言動が適切であることが経験的

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

に確証されたために、周りの人々から繰り返し助言や支援や連帯を求められるようになった人が「自立した人間」と呼ばれるというだけのことです。「自立」とは名乗りではなく、呼称です。周りの人から「あの人は自立した人だ」という承認を受けるといことです。「自立」というのは集団的な経験を通じて事後的に獲得される外部評価です。ですから、「自立した人間」は、「敵」であれ「友人」であれ、「保護すべきもの」であれ、多くの他者によって取り囲まれていきます。そのネットワークの中で絶えずおのれ自身を造型し、解体し、再改訂し、ヴァージョン・アップするのが「自立した人間」です。

しかし、実際に八〇年代以降日本社会で「自立した人間」と呼ばならわされてきたのは「孤立した人間」の方でした。

人間の孤立化はさまざまな病態を取ります。「学びからの逃走」はその初期的なものの一つです。孤立した自分がたった一人で学校というシステムと正面切って向かい合っている。自分自身の価値観を学校システムに対等のものとして対峙させる。「これを勉強することにはどんな意味があるんですか？」という問いをつきつける。自分にとって「価値がある」と理解できないものについては、これを学ぶことを拒否する。それが自己決定である。学ばないことから生じるリスクは自分で引き受ける、と。

確かにそうなのです。彼らはそのリスクを堂々と引き受けているわけです。四則計算ができない、アルファベットが読めない、漢字が読めない、自分に興味のある領域についてのトリヴィアルな知識はあるけれど、興味が無いことは何も知らない。意味の「虫喰い」状態の世界を特に不快とも思わずに生きている。そうやって彼らは階層下降のリスクをきつぱりと引き受けているわけです。

(内田樹『下流志向』による)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本文化が外国語の文献の翻訳に負うところは、まことに大きい。私は今翻訳の歴史を三期に分けて、そのことを考える。

翻訳の第一期は、中国の古典の読み下しの時期である。この独特の翻訳法は、平安時代から行なわれて江戸時代に及んだ。中国語の語順を変え、日本語の助詞と語尾変化を加え、一部の単語は訳し「訓読み」、多くの単語はそのまま外来語として採用する「音読み」。どうしても多数の中国語の概念を輸入する必要があつて、それに相当する日本語の語彙がかぎられているという条件の下では、おそらくそのほかに解決の手段がなかった。

(中略)

第二期は、明治以後およそ百年、西洋語からの翻訳の時期である。そのとき、法体系から科学技術まで、西洋の概念の輸入は、「近代化」のための急務であつた。そういう事情は、必ずしも日本の場合にかぎらないが、明治の日本の特徴は、西洋から概念を輸入するのに、西洋語をそのまま外来語として用いず、ほとんどすべての語を翻訳したということである。中国語の読み下しを始めたときとはちがつて、すでに日本語には豊富な語彙があり、しかも必要に応じて新語を作る力があつた。

(中略)

翻訳の第三期は、今日から将来へかけてであり、そこでの問題には二面がある。日本語への翻訳と日本語からの翻訳。今までのところ、古典中国語または西洋語以外の言葉から日本語への翻訳は、したがってかぎられていた。今後補うべきものは、技術的先進国以外の地域の文化への関心であり、したがってその文献の翻訳であろう。たとえば、アラビア語の地域にあるのは、石油だけではなく、今日まで外部に知られることの少なかった学問と文芸の宝庫である。日本語への翻訳の対象は、西洋語文献の外に、はるかに拡大されなければならない。

日本語からの翻訳の読者は、もちろん、日本人ではない。しかし日本語からの翻訳に、日本人が関心をもち得るし、またもつべき理由は、いくつかある。第一、日本人が日本人のことだけを心配して

いるのは、鎖国心理にすぎない。いくらか他人の便宜も考えるのが、天地自然の理に適うだろう。日本語文献の——科学技術から日本人による日本批判までを含めてのそのの——国際的な言語への翻訳は、多くの他国人のために役立つはずである。第二、日本国の対外関係が、経済的な面にかぎられたままで、長く安定するだろうとは想像し難い。政治的にはアメリカ追随、文化的には沈黙ということ、もうけるだけでもうけられる時代は終りそうである。第三、日本人の表現・意見・知識などを知りたければ、日本語を覚えたらよからう、という説は、事の一面を指摘するだけである。もし日本語を覚えようとする他国人の増加する条件があるとすれば、それ以上に日本語からの翻訳を求める読者の増加する条件があるにちがいない。日本語は孤立した言語である。言語学的に孤立しているから、たとえば英語国民がフランス語を覚えるように日本語を覚えることはできない。歴史的社会的に孤立しているから、かつての植民地帝国の言葉「英仏語」のように、アフリカやインドやオーストラリアで、日本語が話されることはない。日本語は日本人だけが話し、他国人にとっては習得の比較的困難な言葉の一つである。したがって日本語からの翻訳の必要は大きく、翻訳の仕事はまた日本側からの努力を必要とするのである。努力の内容は、翻訳の技術的な面にも係わり、大いに経済的な面にも係わる。しかしそのいずれの面についても、その意志さえあれば、原則として克服できない障害はないだろう。

(加藤周一『翻訳のこと』による)



すなわち、人間の社会的欲望には、他人を模倣して他人と同一の存在であると認めてもらいたい模倣への欲望と、他人との差異を際立たせて自己の独自性を認めてもらいたい差異化への欲望との二つの形態があるのである。いずれも、一体どのような他人によってどのようになっているかという点では大いに異なるが、他人に認めてもらいたいという社会的な欲望である点では変りがない。しかも、それらは往々にして同一の個人の中に共存している。

当然、このような社会的欲望の二つの形態のちがいに応じて、モノに対する人々の欲求の形態も異なってくる。模倣への欲望は、人々に、他人が既に所有しているモノを求めさせ、他人と同じように消費させるであろう。また、差異化への欲望は、人々に、他の多くの人が所有できないモノや他の多くの人が未だ所有していないモノを求めさせ、また他人と異なった仕方での消費させるであろう。実際、すべての人間社会は、それぞれ独自の方法で、この二つの形態の社会的欲望の存在、とくにそのうちの第二の形態である差異化への欲望に対処してきたはずである。たとえば、多くの共同体的社会においては、共同体

の内部では差異化への欲望は抑圧され、外部と接触する機会である祭やポトラッチや戦争においては、この差異化への欲望は支配者階級のみが全面的に満たしうるものであったろう。実は、社会的欲望の対処の仕方として今あげた二つの例は、それぞれ大雑把に言って、商業資本的な利潤の創出方法と産業資本的な利潤の創出方法とに形式的に対応しているのである。そして、外部も階級差も失いつつある現代の資本主義においても、利潤の創出方法と社会的欲望への対処の仕方にはやはり形式的な対応関係が見出しうることは、今までの議論から当然察しがつくにちがいない。

現代の資本主義においては、だれもが差異化への欲望をもち、それを満たしたがっている。一体どのようにすればよいのか。もちろん、差異性という価値をもっている商品を買えばよい。だが、そのためには単に他人と異なった商品を買っても意味がない。他人が買っていないのであろう。しかも他人が価値あると認める商品を見つけ出さなければならぬのである。もちろん市場には商品の種類は無数にあり、犬も歩けば棒にあたる。「いや、広告を通じて、棒の方が犬に向ってあたってくる。」そこで、だれかがどこかでそのような商品に行き当たり、差異化への欲望を満足したとしよう。これは、購買

における一種の革新である。しかし、その購買における革新の効果も決して永続するものではない。なぜならば、ある人がある商品を所有することによって差異化への社会的な欲望を満足しているということは、同時に、まだその商品を買っていない他の人々がそれに価値を認めたことでもあるからだ。それは当然これらの人々の心の中に模倣への社会的欲望をひきおこすであろう。それゆえ、購買力が許すならば、かれらもその商品を買いはじめにちがいない。その結果、その商品の社会的な価値はますます高まり、さらに多くの人のの中に模倣への欲望をひきおこし、模倣の群によって商品のブームが生れる。だが、このようなブームの中で、次第に差異性としての商品の価値は失われ、差異性への人々の欲望は再び不足の状態に引きもどされる。それゆえ、また人々は差異性という価値をもつ新たな商品を探し求めていくことになる。そのような商品が再び見出されると、模倣によるブームがおこり、このブームの中でその商品も差異性という価値を失っていく。そしてまた……。

ここでも、差異性の発見と模倣による差異性の喪失という、シシフォスの神話に似た反復の過程が支配しているのである。それは結局、他人に認められたいという人間にとっては絶対的である社会的欲望が、モノのもつ差異性という相対的な価値を媒介としてしか満たされないという、人間の欲望のはらむ根源的なパラドクスの産物であり、その部分的で一時的でしかありえない解決の終わることなき反復なのである。

(岩井克人『ヴェニス商人の資本論』による)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

しかし、記事の生命は真実である。それに可能なぎり接近するた
めには、膨大な取材が必要だ。取材は、もちろん相手の都合が最優先
する。こちらの時間に合わせてくれるなどと思わないほうがいい。相
手は、なにも記者に語る義務はない。もし、向こうから情報をもつて
やって来たら、利用されるのではないかと、逆に用心しなければいけ
ない。そういう世界なのだ。昼間は多忙な政治家や財界人を追っかけ
るには、夜打ち朝駆けとなる。労多くして得るところ少ないことは、
分かっている。だが、この積み重ねなくして信頼できる紙面はできな
い。

(中略)

後輩記者が当時の実力者金丸信の担当を命じられた。だが、新米記
者とあつてなかなか相手にしてくれない。あるとき大雪になった。金
丸は富士五湖の山荘にいます。彼は吹雪のなかを山荘に到着し
た。金丸は感激した。おい、いつでも来ていいぞ。以来、彼にとつて
金丸は重要な情報源となった。「だから政治記者はいつまでも政治家
べつたり、お涙頂戴なのだ」という批判は甘んじて受ける。だが、
重要な政治情報の一部の政治家に独占されている時代にあつては、こ
うした取材も必要だった。

政治部記者の取材の対象は、どうしても政治家・高級官僚・財界
首脳といった国の上層階層になる。その情報はすべて政治部デスクに
集約され、繰り返し比較検討され、補足取材され、真実へ向けてしだ
いに一本化され、紙面化されていく。これまで、一般の人びとの視点
がそこに入りこむ余裕はなかった。こういう取材と紙面化の仕組みを
ここでは「政治部中核型構造」と呼ぶことにしよう。

この政治部中核型構造が問題にされなければならないのは、政治
家密着型・夜打ち朝駆け型の身を粉にして働く記者の生活スタイルで
はない。問われているのは第一に、この構造のもとで得られた情報が
国民の知る権利にこたえる形で読者に還元されたか、である。第二
に、なるほどこの構造は上層部の極秘情報の取得に大きな成果をあげ
ただろうが、半面、それが結果的に日本の政治の古い体質を助長した
のではなかったか、ということである。

こうした反省が出てきたのは八〇年代後半から九〇年代にかけて
だった。有権者の政治離れが加速していった時期である。政治への失
望は、政治部構造が生み出す政治部中核型の紙面への失望でもあつ
た。有権者が政治を見限るということは、その一端を担ってきた政治
記事をも見限ることだった。しかし、私たち政治部記者の多くは当時
それに気づかなかつた。政治離れは政治が悪いから起きる、と思いこ
んでいたふしがある。その間に政治離れと新聞離れは密接にからみあ
い並行して進んでいたのである。読者の新聞離れを加速させた主因の
一つは政治部中核型の紙面づくりにあつた、ということとは認めざる
を得ない。

九八年の朝日新聞読者調査によると、「党利や派閥に関する記事は
読みたくない」という回答が多く、「いちばん読みたくない記事は自
民党の派閥に関するもの」というのもあつた。半面、「客観的事実だ
けではなく、背後にどういうことがあつたか、それがどういう影響
を国民にあたえるか、きちんと書いてほしい」「政治が決める数字が
生活にどう影響するか、シミュレーションをまじえて解説してもら
いたい」といった希望が多かつた。質の高い政治記事なら必ず読者は
戻ってくることを確信させる。

(中馬清福『新聞は生き残れるか』による)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

冷戦は「仮想の戦争」などとも呼ばれました。実際に砲弾が飛びかうことはなかったものの、米ソ両超大国がいつも敵意を向け合い、一触即発の状態が続く、ある種の世界大戦だったという理解です。四〇年あまり続いた冷戦が終わったとき、世界には「これで暗く危険な時代が終わった」という安堵感が広がりました。たしかに、米ソ核戦争の脅威が遠のき、圧政に苦しんでいた共産主義体制下の人々が解放されたのですから、そういう安堵感にも無理からぬものがあります。これで世界平和が約束されたかのような、楽観的な雰囲気さえ世界には漂いました。資本主義と自由主義が勝利し、もはや争いの種はなくなつたのだから、これで「歴史は終わった」とする、いまにして思えば性急にすぎると言までも飛び出したものです。

言うまでもなく、世界の状況はそうのように好転したりはしませんでした。むしろ、冷戦までの世界にはあまり見られなかった種類の戦争が見られるようになったのです。見られるようになっただけでなく、それが多発するようになったとさえ言えるかもしれません。

その一つは、国家対国家の戦いではなく、他者との差異を意識する人間集団の間で、その差異を誇示することが目的であるかのように戦い合う武力紛争です。典型的には、一九九二年から九五年まで続いた、ボスニアヘルツェゴヴィナ紛争を考えればよいでしょう。それまでユーゴスラヴィア人として共存していたモスレム（ムスリム）人、セルビア人、クロアチア人等の人間集団が、凄惨な殺し合いをくり広げた戦いです。

分かりやすく、「民族紛争」と呼ぶこともできますが、一九四五年からの四十六年間は、ユーゴスラヴィア国民として上手に共存していたのですから、全く異質な民族同士が争うのとはやや違います。また、民族ごとに自前の国家を持つとした、というのとも少し違います。各共和国が「独立」した後も、それぞれの中で「民族」混在は続いているからです。むしろ、何かに憑かれたように他者との差異、つまり自分たちのアイデンティティを強調し、相手にそれを押しつけるために戦った、という面が多分にあるように思われる

のです。

このように、自己のアイデンティティを主張することが目的であるような政治関係を、イギリスの平和研究者であるメアリー・カルドローは「アイデンティティ・ポリティックス」と呼び、それが引き金となつて起きる武力紛争を「新しい戦争」と名づけました。それに対する「古い戦争」とは何か。それも説明が簡単ではないのですが、しいてひとくちで言うなら、国益をめぐって国家と国家の間でおこなわれる戦い、ということになるでしょうか。

国益というものが一応は具体的であるのに対し、アイデンティティというものは多分に抽象的です。自分のアイデンティティと他者のアイデンティティとの違いを強調したところで、それが必ずしも自分の利益に結びつくわけでもない。そのために殺し合いまでしなければならぬことなどは考えにくいのです。それまで一つの国民として共存できていたのなら、なおさらそうでしょう。にもかかわらず、それが起きやすくなりました。旧ユーゴと似たような紛争が、冷戦終焉後、それぞれに違いはありますが、ソマリアでも、ルワンダでも、コンゴでも起きたのです。

（最上敏樹『いま平和とは』による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

明治の新しい日本が、西洋文明の移入を合言葉とし、その移植によつて成立したことは、誰も知るところですが、この輸入された西洋の「文明」のなかには、少なくともはじめのうちは「文学」は含まれていませんでした。

明治初年の代表的思想家である福沢諭吉は、坪内逍遙が「当世書生気質」を発表したとき、「文学士ともあらう者が小説などといふ卑しいことに従事するとは怪しからん。」と憤つたと伝えられています。

この挿話は真偽の点で多少うたがわしいようですが、少なくともこういう噂が不自然でなく流布したという事実は、象徴的な意味を持っています。

それはまず諭吉らの代弁した「文明」の性格を、次にそのような時代の常識に取って逆った若い逍遙の反抗の意味を、さらにその作品の内容よりむしろ「文学士」の肩書で世間を騒がせた逍遙の仕事の実質を、巧まずして現わしています。

諭吉と逍遙はともにすぐれた啓蒙家であり、西欧文化の紹介者であつたのですが、彼等は二十歳の年齢の差とともに、異つた価値の秩序に生きていたのです。「西学の東漸するや、初その物を伝へてその心を伝へず。学は則格物窮理、術は則方技兵法、世を挙げて西人の機智の民たるを知りて、その徳義の民たるを知らず。況やその風雅の民たるをや。是に於いてや、世の西学を奉ずる者は、唯利を是れ図り、財にあらでは喜ばず。……天下の士は殆ど彼のプラトオが政策を学びて詩人を逐はんとするに至れり。」と森鷗外が「しがらみ草紙」の創刊号でいいますが、ここに逍遙と並んで「風雅」の偉大な啓蒙家であつた彼に、明治初年の時流がどう映つたかがはつきり示されています。

福沢諭吉は西洋の武力とその根底をなす知力、あるいは西洋の社会をきざきあげた「人民の活発な気性」については、透徹した理解の持主でしたが、幾度か西洋の地を踏んだにもかかわらず、その芸

術にたいしてはまったく何の興味も同感も示していません。幕吏として外遊し、「彼の国の『ダンス』を見れば捧腹に堪へず、」とした彼は終生その説を改めなかつたので、自分の西洋讚美は、その「美術の美を見て之に心酔するにも非ず。」といいきつています。

こうした文学にたいする態度は、福沢個人の資性より、むしろ明治の初年という時代の性格であつたので、艦隊の脅威のもとに鎖国をとき、「列強」の圧力に対抗し、亡国の運命をさけるために、その文明の採用を焦眉の急とした時代の人々が「近時文明の骨髓」を「蒸気電信の発明、郵便印刷の工風……其他医薬殖産工業……政治経済論」とのみ見たのは当然のことであり、もっぱら国家に有用という立場からなされた明治初期の西洋文明移植が、後代から想像し得ぬほど、急激な革命として断行されたのと照応して、この時代を支配した啓蒙家たちの功利思想はいわば革命期の偏狭さを持つ徹底した性格のもので、そこに小説のような「無用」の存在を許す余地はなかつたのです。

したがつてこの啓蒙家たちの頭脳に宿つた文学不要論は、儒学と結びついた英国風の功利主義として後の時代まで明治の政治家の思想の基調をなしたので、逍遙以後の明治小説は、硯友社も、自然主義も一貫してこのような社会の良識にたいするさまざまな反抗の形式として発達したのです。

このような時代の性格がもつとも露骨に現われた明治初年には、西洋の「文明」は新しい文学をおこすどころか、逆に在来の文学を枯らす作用しか持たなかつたので、ことに戯作として江戸時代にはまともな文学としても扱われなかつた小説は、わずかに社会の片隅に余喘を保つただけでした。

(中村光夫の文章より)



さらに、人格を形成していくための重要な場所として、かつては技術の修得が今日よりもはるかに重い手応えを持っていました。現在も技術の修得が人間を作っていることは事実ですが、しかし、これもまた、残念ながらその重さの点で戦線を縮小しつつあるといわなければなりません。たとえば、昔は大工さんになるためには一生の努力を必要とするといわれたもので、私のうちへ時たま来てくれる大工さんは三十年のベテランですが、そういう人が、「大工というものは一生修行ですよ」と今でもいっています。しかし、その後で彼は頭をかい

て、「今どきこんなこといっていると、時代からとり残されますがね」とつけたすのです。

というのは、現代では技術そのものが現実体験ではなくて、情報化された一種の知識の組み合わせになっていて、その分だけたいへん修得しやすいかたちに変わっているからです。早い話が、板というものを一枚を取り上げても、昔の板は人間が鉋を握って、その鉋を動かす自分の腕を通して体験する本当のものでありました。しかし、現在の板はほとんどが合成樹脂で、鉋や手は必要ではなく、いわば、人間の目さえあればそれで用のすむ存在になりつつあります。一枚の板がものであることをやめて、しだいに板のイメージ、すなわち一種の情報になりつつあるわけです。

そうになると、それを扱う個人の技術はいちじるしく単純化されて、肉体に触れる体験の領域が小さくなって来ます。今日、技術の修得は一生の仕事だという人は、だんだん少なくなり、だいたい免許証をもらえば、技術はそれで完全に習得されたことになっています。料理人や理髪師、自動車の運転手に学校教師、すべて免許証をもらえば、彼らにとって職業および技術の修得段階は終りだという意識が広がっています。現に、それさえ持つていけばまず最低限度の生活はできるわけですが、その代わり、その技術をさらに伸ばして、彼独特の技術にする楽しみもなくなりました。

(中略)

職業のことをドイツ語ではベルーフ(Beruf)といいます、ベルーフとは「神の呼び声」という意味です。日本語にも「天職」ということばがあるわけで、職業とは食うために勝手に人間が選ぶものではなく、最終的には運命か、あるいは神が人間をそこへ呼びこむものだ、という考えが伝統的にありました。それほど職業

には神秘的といつてよいほどの重みがおかれていたのですが、そのひとつの理由は、人間が職業訓練の中で意識的な知識以上のものを獲得する、という事実ではなかったでしょうか。ものに触れる体験というもの、たんなる知識の学習とは違って、人間が自分で意識できない自己の部分を豊かにします。鉋で板を削って十年、二十年を過ごすということは、彼の肉体の思いがけない部分をふとらせることもあるし、「職人気質」などという、いわゆる難しい難い精神の部分を養うこともあります。じつは、人間の個性とはそうした無意識なものの集積として生まれるものであり、この部分こそ個人の中で真に交換不可能な要素だといふべきでしょう。

これに対して、現代の現実が情報化していくということは、いいかえれば、現実のすべてが知識化していくことであり、その内部の意識を越えた部分が消滅しつつある、ということだといえるでしょう。そして、それにつれて、現実とかわる人間もまた情報化され、肉体も気質も持たない観念的な存在に変質しつつあるわけです。ひとつの中心を持ち、有機的な統一を持った「私」としての人間が解体し、巨大で、しかし全体像の見えない、奇妙な機械の部分品になりつつあるのが現代だと見るべきでしょう。

(山崎正和『混沌からの表現』による)



生き残る方言のもうひとつは、方言だとわかつてはいるが、使わないではいけないといったものである。それらは、文末詞や、感情語彙、程度副詞、挨拶ことばなどの中に多い。例えば、仙台の文末詞なら「行くつチャ」の「チャ」がよく使われる。これは共通語に直せば「行くさ、行くとも」であり、「当然だろ、何でそんなこと聞くんだ」といったニュアンスを表す。また、「行くべ、行くべ」は、「行こう、行こう」という意味で、相手を誘うときによく使う。こういった「チャ」や「べ」は今でも元氣である。

感情語彙では、「メンコイ」や「イズイ」が生き残っている。「イズイ」は、体表面のなんとも言えぬ不快感を表すもので、襟元に毛が入って「イズクテたまらない」とか、セーターを洗ったら縮んでしまった「イズクテしょうがない」といったふうに使われる。こういう方言は、今でも老若を問わず根強い人気があって、かなり使われている。気づきにくい方言と違い、これらこそ地元の人々の支持を得た、正真正銘生き残る方言と言える。

これらの「真正」生き残る方言に共通するのは、いずれも相手の感情に訴えかける性質をもつという点である。右で見た文末詞や感情語彙はもちろん、程度副詞「関西のメチャ、名古屋のデラなど」や挨拶ことば「東北のオバンデス」も、同様に理解してよいだろう。これらの感情的要素は相手の心に響くものだけに、会話の雰囲気を取り除かない、打ち解けたものにする効果が抜群である。すなわち、こうした方言を使うことで、「私はあなたと心を割って、親しく話したいんだ」とか、「肩肘張らないで、リラックスして話しましょうよ」といった意思表示を行うことができる。共通語の使用が相手との間に壁を築くのに対し、これらの方言は逆にそのような垣根を取り払い、お互いの心的距離を縮める役目を果たす。現代人は無意識のうちに、こうした方言の機能を会話のストラテジーとして利用しているように見える。

「方言」と一口に言っても、もはやそれはシステムではなくスタイルに変質してしまった。それならば、方言スタイルという確固とした文体が存在するのかといえば、若者たちの方言の実態は、共通語が主体でそこに右に見たような要素をわずかに加えた程度のものにすぎない。会話の雰囲気作りのために共通語に散りばめられる要

素になつてしまった方言を、私は、服飾になぞらえて「アクセサリー」としての方言と呼ぶ。アクセサリーはあえて付ける必要のないもので、それを付けることには積極的な意味がある。同じように、若い人たちは共通語だけで十分コミュニケーションが成り立つのに、あえて方言を使おうとしている。それは、親しい仲間同士の会話を楽しむ潤滑油として、方言の価値を認めているからにほかならない。

ところで、アクセサリー化したといっても、仙台あたりの若者が使う方言はあくまでも地元の方言である。ところが、最近では、東京の若者たちが、全国各地の方言を取り込んで携帯メールを楽しんでいるという。正直、方言がここまでくるとは思わなかった。考えてみればこうした無国籍的な方言の使い方は、アクセサリー化した方言の究極の姿であると言えるだろう。だが、土地から遊離した方言は果たして方言と言えるのか。「母なることば」方言」というイメージにとらわれていると、蕎麦の薬味のような方言を方言と認めるには抵抗がある。「方言」とは何であるか、自明のように思われたことが、今、あらためて問われているのである。

（小林隆『現代方言の正体』による）



ところが、近代になって欧米の影響を受けると、「ウソ」も「虚偽」も一括して「これを悪事と認定するような風潮が起こった」と柳田は言う。そして、柳田は西洋と日本の違いを当時既によく認識しており、日本では平気で「ウソばかり」とか「ウソおっしやいよ」とか言うが、これをそのまま英語に直訳すると大変なことになると指摘している。

場を保つために、日本では「ウソ」がある。これに対して、西洋ではジョークがあるのでなかろうか。ここで大切なことは、日本では、場の方から発想し、次に個人に及んでくるが、西洋では、まず個人があり、その次に個人と個人の関係を円滑にする「日本的に言えば、場を保つ」ことが考えられるので、その在り方が異なってくるのである。日本人であれば、その場を保つためには、あることないことを適当に話しても、その言葉に個人としての責任はない「と言っても程度があつて、あまりに「場あたり」のことを言うのはよくないと考えられる」。これに対して、欧米人の場合は、どんな場合にでも発言したことについてはその人の責任が伴うので、日本人的「ウソ」は言えない。と言つて、すべての人が「ホント」のことばかり話をする、ギクシャクしてきてたまらない。そこで、ジョークを言うことが必要になる。ジョーク抜きでは対人関係がうまくいかないのである。

相手から何かが要求されるが、それは到底できそうにない。そのとき日本的であれば、相手の気持ちを汲んで、「難しいことですが、何とか考えてみましょう」と言う。しかし、これは西洋から見れば「ウソ」である。西洋人の場合は、「ノー」と言うわけだが、このときに場を和らげようとすると、ジョークが用いられる。そのジョークのなかに、相手の気持ちや、自分はどうしてもやりたいとは思ふけれどできない、などという気持ちがうまく入れこまれていると、この人は「社交性」があるということで評価される。

「社交的」という言葉は、日本ではむしろ否定的な感じを与える。

しかし、欧米では、それはむしろ当然のことである。あちらでは、子どものときから「社交的」であるためのエチケットやふるまいについて訓練される。日本人は「ノーと言えない」などと言われるので、それを意識して、欧米人につき合うときは、「ノー」と言うべきだと張り切る人がある。残念ながら、そんなときに社交

性を身につけないままで「ノー」と言うので、大変粗野に見えたり、無礼に感じられたりする。それぞれの文化は、長い歴史のなかで、全体的にその生き方を洗練してきているので、他の文化とつき合うのは、ほんとうに難しいことである。

こんな体験をしていると、無理して欧米に同調するよりは、日本の方法に頼りながら、その意味を説明する方がいいのじゃないか、と思ったりする。欧米の規範によると、日本人は「ウソツキ」ということになりやすいが、実はそうではないこと、場を出発点とするか、個を出発点にするかによって、言語表現の在り方がどう異なってくるか、などについて説明するとよい。欧米中心の考えは今も根強いが、他文化に心を開こうとする人も増えてきたので、この方が喜ばれることもある。

(河合隼雄『日本人と日本社会のゆくえ』による)



一九世紀後半のイギリスの登山家のうちには文人、学者、知識人がたくさんみられるが、安全な社会の中に暮らしているこれら中流階級の人々にとつて、登山とは自然の中で危険に対峙して勇気をたしかめ、しかも同胞意識を高めるための絶好の機会であった。しかも、荷物の運搬人とガイドをよつての彼らの登山は、家事使用人の労働に支えられた彼らの生活様式にかなうものでもあつた。運搬人とガイドはアルプス登山の不可欠の要素であるという繰り返された発言は、たしかに一方では登山に必要な慎重さの表明ではあるにしても、その発言のどこかに、中流階級の意識へのこだわりというか、固執が感じとれはしないだろうか。一九世紀後半のスポーツとしての登山には、つねにそのような中流意識がみえ隠れする。

ステイーヴンにしてもその例外とはいいがたいが、それでも彼の場合には、その潜在する中流意識を越えて、登山をスポーツとしてとらえようとする志向がよよくでてる。しかも、彼の山岳エッセイのなかでそれが最も鮮明にでてるのが、「岩場での墜落」をめぐる記述においてなのである。問題の文章は『自由思考と平易な語り』『一八七三』に収められている「アルプスでの魔の五分」と題されたエッセイ。谷間の岩場で墜落の危険に直面した「私」が、いかなる宗教上の立場を信じているのか考えてみるという、たしかに一風変わった内容である。「私」はどのようにして「魔の五分間」の恐怖に耐えることができるのか。

正直なところ、いかなる信仰をもつ人であっても、私と同じ立場におかれたら大いに心乱れるのではあるまいか。いくらかでも役に立つ唯一のヒントは、別の、はなはだ威厳に欠けるところから来た。何年も前のことになるが、テムズ河でのボート・レースに出ていて、一度負けたことがあつた。そのときと事情が少し似ているのだ。負け試合の場合、すべての希望が消えて、ただ漠とした名誉感からのみ漕いでいることがある。腕の筋肉は裂けそうになるし、背中は痛み、肺の血管がすべて切れてしまうのではないかい

う気分になる。残っている生命力のすべてが動物的な機械と化した体を動かすのにさし向けられるものの、ひどく辛く、体にも悪く、何らよい結果を生みだすはずもないこの作業を続ける確たる理由などありはしない。にもかかわらず、一瞬でもそれを中断すれば人生も幸福もないと言わんばかりに漕ぎ続け、残っているかぎりの精神力をその仕事にそそぐ。ちやうどそれと同じように、岩にしがみついているという努力が私の思考のすべてをしめていた。何があろうと、いかなる理由づけができるにしても、あるいはできないにしても、ともかくこのゲームの残された部分をきちんとフェアにやり通さねばならないのだ。

ステイーヴンの意図ははっきりしている。危険な岩場での生死をかけた努力をスポーツの、ここではボート・レースの隠喩で説明しているのである。たとえ敗北が分つていても最後まで全力を尽くすこと、それが彼の考えるフェア・プレイの精神である。ここでは、その精神がスポーツと人生の双方に共通するものとしてもちだされているのだ。それは、あるいは墜落の世俗化と呼んでいいのかもしれない。ロマン主義的な想像力の対象であつたものが、世俗的なスポーツの枠の中で語りうるものに変容しているのである。その変容を可能にしたのは、言うまでもなく、登山の世俗的スポーツ化という時代の趨勢であつた。

(富山太佳夫『空から女が降ってくる』による)



パリとロンドンを往復したたくさんの書簡において、熊楠が書いて
いることの中でも、もっとも重要なのは、事という概念をめぐる彼の
思考である。ここには、とても現代的な思考法を、みいだすことがで
きる。熊楠はその考えを、まず自分の考える学問の方法論として、語
り出している。

熊楠の考えでは、事は心と物がまじわるところに生まれる。たとえ
ば、建築などというものも、事である。その場合、建築家は自分の頭
の中に生まれた非物質的なプランを、土や木やセメントや鉄を使つて
現実化しようとするだろう。建築物そのものは物だけれども、それは
心界でおこる想像や夢のような出来事を実現すべくつくりだされた。
つまり、それはひとつの事として、心と物があいまじわる境界面のよ
うなところにあられわてくる現象にほかならないことになる。

このプロセスは、もっと精密に研究してみることできる。建築家
は設計図を描く。そして、その設計図をもとにして、建築の物質化が
実行される。このときの設計図もまた、事なのである。設計図は、建
築家の頭の中に浮かんだアイディアを、明確な構造をもった透視法の
中に定着させるものだ。ここでは「設計図の描き方」という表現法自
体が、アイディアの物質化をたすけている。だから、そこでも心と物
が、出会っている。そうなると、建築という行為そのものが、

幾重にも積み重ねあわされた事の連鎖として、できあがっていること
がわかる。記号や表象が関係しているものは、こうして考えてみる
と、すべて事なのだということが、はつきりしてくる。

いまの学問にいちばん欠けているものは、この事の本質についての
洞察だ、と熊楠は考えた。彼の考えでは、純粹なただ心だけのもの
とか、純粹にただ物だけのもの、というのは、人間の世界にとつて
は意味をもたず、あらゆるものが心と物のまじわりあうところに生ま
れる事として、現象している。しかも、心界における運動は、物界の
運動をつかさどっているものとは、違う流れと原理にしたがつてい
る。このために物界では、因果応報ということが確実におこるのに、
純粋な心界でも因果応報がおこるとは限らないのだ。たとえその人
の心に悪い考えがおこったとしても、その考えが物界と出会って、そ
こにたしかな事の痕跡をつくりだし、物界の流

れの中に巻き込まれてしまうことがなかったとしたら、そのことだけ
では、けつして将来に報いをつくりだすとは限らない。
事は異質なものの出会いのうちに、生成される。そして、その事
が、ふたたび心や物にフィードバックして働きかける過程の積み重ね
として、人間にとつて意味のある世界は、つくりだされてくる。熊楠
はこの事の連鎖の中から、ひとつの原則がみいだせるはずだと考え
た。

ここで熊楠が考えていることは、とても大きな現代的な意味をもつ
ている。まず彼は、人間の心の働きが関係するいつさいの現象につ
いての学問にとつて、いちばん重要な意味をもつのは事であるけれど
も、この事は対象として分離することができない構造をもっている、
と言っているのだ、心界におこる動きが、それとは異質な物界に出
会ったとき、そこに事の痕跡がつくりだされる。しかし、その事はも
とも心界の動きにつながっているものだから、心界の働きである知
性には、事を物のように対象化してあつかうことはできないのだ。し
かし、その分離不可能、対象化不可能なダイナミックな運動である事
をあつかうことができなければ、どんな学問でも、自分は世界をあつ
かっているなどと、大口をたたくことはできなくなるわけだ。
ここには、二十世紀の自然科学が量子論の誕生をまつて、はじめて
直面することになった「観測問題」の要点が、すでに熊楠独自の言い
回しによつて、はつきりと先取りされている。

(中沢新一『森のバロック』による)



読解問題 4月4週分

問1 読解マラソン集1番「テーマパークのなかで」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 長崎のハウステンボスは、借景を生かしていることで知られている

B 天龍寺の庭園は、作られた庭園でありながら、現実の中に位置づけられている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「テーマパークのなかで」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A テーマパークは、外界よりもコンセプトを中心に据えて庭園を作っている

B テーマパークは、空間に価値を与えるという点で多様性を生み出している

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「自己決定・自己責任というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 孤立した人間は、他社の存在を妨害として見る

B 孤立した主体の求めるような百パーセントの自己実現はありえない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「自己決定・自己責任というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 自立した人間になるためには、自分が自立しているという自覚を持つことが大切だ

B 自立した人間は、他人からの評価を超越して、自分の責任でリスクを引き受ける

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「日本文化が外国語の文献の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 明治時代の日本語には、西洋の概念を日本語に翻訳して輸入する力があつた

B 中国語の概念と西洋語の概念は、まだ日本語としては十分に根づいていない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「日本文化が外国語の文献の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本語からの翻訳とは、次々と生まれる新しい言葉をわかりやすい日本語に移しかえることである

B 日本語の概念を国際的な言語に翻訳することは、外国の人にとって役立つはずだ

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「すなわち、人間の社会的欲望には」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 模倣への欲望と差異化への欲望が、個人の中で同時に共存することはない

B 情報化社会の中では、差異化への欲望を満たすことはますます困難になっている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「すなわち、人間の社会的欲望には」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 模倣への社会的欲望が広がることによって、商品のブームが生まれる

B 模倣する人が多くなればなるほど、差異性という価値は少なくなっていく

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 5月4週分

問1 読解マラソン集5番「しかし、記事の生命は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 夜討ち朝駆けは、相手の信頼を得るためにある

B 政治部中核型構造は、一般の人々の視点を代弁していた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「しかし、記事の生命は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 有権者の政治離れの一つの原因は、新聞の政治記事のスタイルにあった

B 読者の多くは、派閥に関する記事に関心を持っている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「冷戦は『仮想の戦争』などとも」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 冷戦が終わったあとも、多くの人の予想に反して戦争の種類は変わらなかった

B 冷戦が終わったあと、国家対民族の争いが増えるようになった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「冷戦は『仮想の戦争』などとも」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 冷戦後のユーゴスラヴィアでは、異なる民族どうしが互いの独立を求めて戦うようになった

B アイデンティティの違いは、国益ほど利益には結びついていない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「明治の新しい日本が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 明治初期には、西洋のあらゆるものが賛美され、次々と日本に移植された。

B 福沢諭吉は、その生涯を通して、西洋の芸術に全く興味を示さなかった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「明治の新しい日本が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 諭吉と逍遙はいずれもすぐれた啓蒙家であるが、芸術に関する見解は全く異なっていた。

B 諭吉をはじめとする明治初期の啓蒙家の思想は、ある種の偏狭さを持つ徹底した性格のものだった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「さらに、人格を形成していくための」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 今日の技術の修得が容易になったのは、技術が情報化された知識になったからである。

B 今日では、職業の修得において、知識を超えた部分は次第に消滅しつつある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「さらに、人格を形成していくための」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 免許証をもらえば、技術を修得したことになるというのは、技術が意識的な知識となってしまったからである。

B 職業における技術が知識化されると、その技術を土台にして作る人の個性が生かせるようになる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 6月4週分

問1 読解マラソン集9番「生き残る方言のもうひとつは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 生き残る方言とは、共通語にはない感情を表している言葉である
B 共通語は、話をする人どうしの間に垣根を作る面がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「生き残る方言のもうひとつは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 若者たちは、方言の新しい機能を利用している
B 若い人たちの間では、共通語だけでは十分なコミュニケーションが成立しなくなっている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「ところが、近代になって」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本では、場を保つために言ったウソに対して、個人の責任はない
B 欧米人は、本当のことだけを言って話がごくしゃくしてしまったときに初めてウソを言う
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「ところが、近代になって」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 欧米では、「ノー」をはっきりと言う方が社交性があると見なされる
B 日本人は、欧米人にウソつきだと思われないように、もっとジョークを学ぶ必要がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「一九世紀後半のイギリスの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 一九世紀後半のイギリスの登山家たちには、中流階級の意識があった
B スティーヴンは、墜落の危険に直面している最中に、ボート・レースのことを思い出した
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「一九世紀後半のイギリスの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「墜落の世俗化」とは、多くの人が、墜落の危険性のあるような登山に挑戦するようになったことである
B 登山におけるロマン主義的な想像とは、登山をスポーツのように見なすという想像である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「パリとロンドンを往復した」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 建築とは、建築物という「物」とそれを作ろうとする「心」の境界にあらわれる「事」である
B 建築物が「物」だとすると、設計図は「心」である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「パリとロンドンを往復した」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「物」の世界での因果関係は確実性があるが、「心」の世界では必ずしもそうではない
B 「物」は「心」と分離して扱うことができるが、「事」は「心」と分離して扱うことはできない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

4～6月

小1 コード: nane ス: パ	小2 コード: nane ス: パ	小3 コード: nane ス: パ
小4 コード: nane ス: パ	小5 コード: nane ス: パ	小6 コード: nane ス: パ
中1 コード: nane ス: パ	中2 コード: nane ス: パ	中3 コード: nane ス: パ
高1 コード: nane ス: パ	高2 コード: nane ス: パ	高3 コード: nane ス: パ

1～3月

小1 コード: nane ス: PDF	小2 コード: nane ス: PDF	小3 コード: nane ス: PDF
小4 コード: nane ス: PDF	小5 コード: nane ス: PDF	小6 コード: nane ス: PDF
中1 コード: nane ス: パス	中2 コード: nane ス: パス	中3 コード: nane ス: パス

ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF
高1 コード： nane パ	高2 コード： nane パ	高3 コード： nane パ
ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF